

〔第1回 これだけは知っておこう 留学／フィールドワークのリスクマネジメント〕

シンポジウム参加報告 ——留学を支援する立場から——

Report on Symposium: From the Perspective of a Study Abroad Coordinator

小松 謙一郎
KOMATSU Kenichiro

東京外国語大学留学支援共同利用センター
Tokyo University of Foreign Studies, Student Mobility Center

キーワード

海外留学 リスク管理 性被害

Keywords

Study abroad; Risk management; Sexual victimization

Quadrante, No.24 (2022), pp.93–96.

「グローバル人材を育成しよう」「大学の国際化を進めよう」との掛け声のもと、日本国内の高等教育機関では、学生の海外留学を日々推進している。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、留学をはじめとする国際交流は大幅な縮小を余儀なくされているが、各大学・学校では、オンライン交流などを導入して、国際交流事業が停滞しないよう様々な努力を重ねているところであろう。そして、今後渡航に関する制約が緩和、あるいは解除されれば、再び数多くの学生が海外へ飛び立っていくことが容易に推測される。ただし、送り出す立場としては、新型コロナという新たなリスクが加わる中で、安心・安全な海外渡航をどう実現させるか、ということに頭を悩ませなければならない。

東京外国語大学においては、2021年の夏から交換留学の派遣を一部再開したところであるが、全面再開とはなっておらず、コロナ前のような状態に戻るにはまだしばらくかかりそうである。そうした中ではあるが、10月に、留学・フィールドワークのリスクマネジメントをテーマにしたシンポジウムが開催され、登壇者の一

人として参加させていただいた。リスクマネジメントと銘打っていたが、主たる目的は、可視化されにくい海外での性被害を取り上げて、今後、海外に渡航する学生に対する意識付けや、対策についての実用的な知識を提供することにあった。

* * *

海外派遣学生の危機管理に頭を悩ませている大学は多い。文部科学省からはガイドラインは示されているものの、具体的な対応は各大学に任されている形である。筆者のもとにも、時折、他大学の国際交流担当者から危機管理の現状についての問い合わせをいただくことがあるが、他大学での取り組みを参考にしたい、という訴えが多い。裏を返せば、何が正解なのかが分からないということであろう。隣と同じことをやっていれば大丈夫という横並び意識は、決して褒められたものではないが、各担当者が知恵を出し合って最適解を導きだそうとするのは良いことであり、他者の取り組みを知ること



は当然有用である。今回のシンポジウムには、他大学の教職員の参加もあり、このシンポジウムがそれぞれの大学の危機管理を考える上での一助になっていれば幸いである。

さて、本学でも危機管理に関しては、様々な取り組みを行っているが、海外での犯罪被害を未然に防ぐことを目的として、危機管理に関する情報提供を行っている。具体的には、新入生の必修科目である「基礎リテラシー」の授業の1コマを使い、『海外渡航におけるリスク管理・危機管理』と題した講義を行っている。また、留学前の学生に対する渡航前オリエンテーションで、危機管理に関する説明を行っているほか、外務省領事局の邦人援護官による危機管理セミナーや、厚生労働省検疫所の担当官による感染症対策セミナーを開催している。

海外渡航中のリスクは様々なものがあるが、今回のシンポジウムでは「性被害」に焦点を当てた。「性被害」は、窃盗などの財産犯罪とは異なり、被害者の心に大きな傷、場合によっては一生消えることのない傷を残すことがある。その点では、より丁寧なケアが必要とされるが、一方で被害者が声をあげにくいこともあって、なかなか表立って取り上げられることが少ない。海外渡航中のリスクマネジメントにおいては、性被害を防止することは非常に重要な課題であるが、渡航前に十分な情報提供や注意喚起がなされていないというのが実態ではないだろうか。

筆者が本学で危機管理関連業務に従事し始めたのは、2015年ごろからになるが、当時は各種説明会の中で、性被害についてはほとんど触れられていなかった。ただし、毎年、内容を見直して、改善を図る中で、性被害についてもっときちんと取り上げて説明をすべきとの問題意識は継続して持ち続けており、2019年になってようやく、性被害に焦点を当てた説明会を開催するに至った。初回は、厚生労働省検疫所

の医務官および、産婦人科の開業医の先生に協力いただき、主に女性を対象とした説明会を開催した。性感染症に関する話や、女性の身体の仕組み、婦人科系の疾患についての説明がなされた。ただし、海外での性被害防止という観点からの情報提供が十分にできたかと言えば、必ずしもそうではなかった。昨年度は、コロナ禍によりオンラインでの開催となった本学での「留学フェア」の中で、性被害に焦点を当てた危機管理説明会を開催することを検討しているときに、SAYNO!の活動を知ることになった。そしてSAYNO!の協力を得て、説明会を開催するに至った。説明会ではSAYNO!から性被害の実態に関して具体的な事例報告があり、学生に対してより身近な注意喚起と情報提供ができたとの感触を得た。

そして、今年度は、本学AA研の椎野先生にお声がけいただいて、私が所属する留学支援共同利用センターも共催組織の一つとして、今回のシンポジウムが開催される運びとなった。

シンポジウムは筆者から以下のトピックで報告を行った。

- ・本学での留学実績
- ・多様化する留学と多様化するリスク
- ・性被害アンケート結果
- ・性被害から身を守るために

持ち時間の関係で、かなり簡略化した内容となってしまったが、特に伝えたかったのは、留学の内容が多様化していることと、それに伴いリスクも多様化していること、その中で性被害をどう防ぐか、という点であった。

留学の多様化の背景としては、文部科学省による「官民協働海外留学支援制度～トビタテ!留学JAPAN 日本代表プログラム～」の存在が大きいと思われる。同プログラムでは、教育機関での座学以外に、現地社会での実践的

な活動を留学計画に盛り込むことが支援の条件となっており、インターンシップやボランティア、フィールドワークといった活動を現地で行うことが必須となっている（座学なしで実践的活動のみの計画でも可）。政府による留学促進キャンペーンの影響もあり、海外でのインターンシップに興味を持つ学生は確実に増えている。また、就職活動に繋がる経験としても語られることが多く、留学相談に訪れる学生からも、インターンなどをすると就活に有利になると聞いた、といった声を聞くこともある。その良し悪しは別にして、現地活動が多様化する中で、留学中に接点を持つ人々が多様化していることは事実であろう。

教育機関への留学であれば接点を持たないような人々と接点を持つようになり、それに伴い、リスクも増えている。送り出す側としては、これまであまり想定していなかったトラブルが起きる可能性がある前提で対応を検討すべきだが、そうしたことができていると言われると甚だ心許ない。萩生田光一元文部科学大臣の次の発言からも分かる通り、これまでとは異なるリスクを想定して危機管理対応を考えなければならない。

『渡航先で外国人との間のトラブルが多いんだろうというふうに先入観を持っていたんですけど、そうではなくて、邦人からの性被害というのが非常に多いということを聞いて、大変ショックを受けました。』（第204回国会参議院文教科学委員会（令和3年3月22日）での萩生田大臣（当時）の発言）
<https://kokkai.ndl.go.jp/simple/txt/120415104X00420210322/41>より引用]

現地駐在員などといった海外の日本人コミュニティは渡航する学生にとっては頼りになる存

在となる一方で、思わぬトラブルの原因にもなりうる。現地駐在経験のある人たちにとっては「よくある話（トラブル）」であっても、学生にとっては未知の世界であり、また、学生が格好のターゲットとされてしまうケースもある。ただし、知っていれば防げることも多い。従って、学生を送り出す側として、まずは多様化するリスクを認識することが重要であり、その上で、そのリスクを回避するためにどうすればよいかを確実に学生に伝えなければならない。留学前に、留学中に起こりうるリスクを自分のこととして想像して、危機意識を高めてもらうことが何より必要である。日常生活にどっぷりと浸かっている状態で話を聞いても、それが自分に関係のあることだと危機感を持つことは難しいが、SAYNO!からのリアルな報告は、自分の身にも起こるかもしれないと、注意喚起する上でも貴重な報告であったと思う。事務担当が「こういうコトも起こります」と話をするより、何十倍ものリアリティを伴って学生には届いているだろう。現地に行ってしまった学生に対しては現実的には何もできない。その場でどう対処するか、すべては学生自身の行動にかかっている。だからこそ、事前に必要な情報はできる限り提供して、リスクを最小化するような行動をとってくれることを祈るしかない。

* * *

さて、個人的なリフレクションであるが、今回、シンポジウムに参加して自分自身、新たな気づきもあった。それは、危機管理を個人の課題と捉えるのか、社会の課題と捉えるのか、という視点である。

今回、シンポジウムで他の登壇者の方の話を聞きながら、自分自身が学生向けの危機管理の話をするときには、被害に遭わないためのノウハウ的な話題ばかりで、いわば個人レベルで

のスキルのな話題、あるいは対症療法的なハウツーの話ばかりをしていたと気がついた。もちろん、現実的に犯罪被害から身を守るためにはそうした話は大切だが、社会的課題として危機管理を説明することはなく、特に性被害については、個人的な課題と捉えるのではなく、社会的な課題として捉えて説明をしなければ、仮に被害にあってしまったときに、自分を責める要因を作ってしまう可能性がある、ということに思い至った。また、男子学生に対しても、社会的な課題として提示することで、自分も関係があることだと考えてもらえるのではないか。この視点は今後、自身が担当する説明会などにおいて活かしていきたいと考えているが、具体的にどのようにするのかは、これからの課題としたい。

最後に、本シンポジウムの企画、開催にご尽力くださった先生方、職員の方々、またご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。